

Maria João Pires & Antonio Meneses Duo Recital

磨き抜かれた技巧と音色、
非凡な構成力と表現力で魅了して止まないピリスの音楽世界と、
円熟の巨匠メネセスが奏でる名器アレッサンドロ・ガリアーノの魂の音色が響き合う!



© Felix Broede/DG

マリア・ジョアン・ピリス (ピアノ) Maria João Pires, piano

1944年7月23日リスボンに生まれ、1948年には公開の場で初演奏を行った。ポルトガルにおいて、カンポス・コエリョとフランシス・ブノワに師事。後にドイツにてローゼル・シュミットとカール・エンゲルに師事する。

15年に渡りエラート・レーベルで収録をしてきたが、その後ドイツ・グラモフォンに移籍し、すでに20年間ドイツ・グラモフォンでレコーディング活動を行っている。ピリスは1970年以来、芸術が人生、社会、学校に与える影響の研究に没頭、社会において教育学的な理論をどのように応用させるか、その新しい手法の開発に身を投じてきた。破壊的で、物質優先の論理を強調するグローバリゼーションに対して、個人の成長を尊重する新しいコミュニケーションの仕方を研究した。

その成果のひとつは1999年ポルトガルのベルガイシュでの芸術研究センター設立として結実した。現在この活動は、スペインのサラマンカとブラジルのサルバドールにも拡げている。

また、2005年、「アート・インプレッションズ」という演劇、ダンス、音楽の実験的グループを結成した。

2009年春の日本ツアーでは「ショパン・プログラム」と「ベートーヴェン・プログラム」をチェリスト パヴェル・ゴムツィアコフと共に披露し、絶賛を博した。

アントニオ・メネセス (チェロ) Antonio Meneses, cello

1957年ブラジル生まれ。16歳の時、南米ツアー中のアントニオ・ヤングロと出会い、渡欧。1977年ミュンヘン、1982年チャイコフスキーの両国際コンクールで優勝を果たす。

ベルリン・フィル、コンセルトヘボウ管、ロンドン響、イスラエル・フィル、サンクト・ペテルブルグ響、スイス・ロマン管、ニューヨーク・フィル等の世界のオーケストラと共演を重ねる。共演した指揮者には、カラヤン、ヤンソンス、アバド、プレヴィン、プロムシュテット、テミルカーノフ等が挙げられる。

プエルトリコのカザルス・フェスティバル、ザルツブルグ、プラハの春、モーストリー・モーツァルト、カラムーア、タンゲルウッド、ラヴィニアなどの音楽祭に多数招かれる。フェルメール・クアルテット、エマーソン弦楽四重奏団、メナヘム・プレスラー (ピアノ)、マリア・ジョアン・ピリス (ピアノ) 等と度々共演。1998年より解散までの10年間ボザール・トリオのメンバーとして世界ツアーを行う。

録音は、カラヤン指揮ベルリン・フィルで、ブラームスの二重協奏曲、シュトラウスのドン・キホーテをドイツ・グラモフォンから。C.P.E.バッハの3つの協奏曲、ハイドンの協奏曲等をリリース。バッハの無伴奏組曲の再録音、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、チェロソナタ等があり、プレスラーとのベートーヴェンのチェロソナタ全集は高い評価を得た。



© Marco Borggreve